

## 野谷文昭教授略歴

- 1948年6月6日 神奈川県川崎市に生まれる。  
1966年3月 東京学芸大学附属高等学校卒業  
1967年4月 東京外国語大学スペイン語学科入学  
1971年3月 東京外国語大学スペイン語学科卒業  
1971年4月 東京外国語大学大学院修士課程入学  
1975年3月 東京外国語大学大学院修士課程修了  
1986年4月 東京工科大学助教授  
1987年4月 立教大学一般教育部助教授  
1992年4月 カリフォルニア大学アーバイン校客員研究員（1993年3月まで）  
1994年4月 立教大学一般教育部教授  
1995年4月 立教大学大学教育研究部教授  
1998年4月 立教大学法学部教授  
1999年10月 メキシコ大学院大学客員研究員（2000年3月まで）  
2001年4月 立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻専任教授（兼任）  
2005年4月 早稲田大学教育・総合科学学術院教授（旧教育学部）  
2008年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授

非常勤講師：津田塾大学、東海大学、神奈川大学、青山学院大学、亜細亜大学、武蔵大学、拓殖大学、中央大学、法政大学、明治学院大学、東京大学、東京外国語大学、早稲田大学、千葉大学

所属学会等：日本ラテンアメリカ学会、日本イスパニヤ学会、日本比較文学会、ボルヘス会、日本ペンクラブ、日本文藝家協会

受賞：チリ政府 リカルド・ラゴス大統領賞（2004年7月）  
財団法人日本スペイン協会 会田由翻訳賞（2010年7月）

# 野谷文昭教授業績目録

## 1. 書籍

● 『ラテンにキスせよ』収録

○ 『マジカル・ラテン・ミステリー・ツアー』収録

■ 『越境するラテンアメリカ』収録

- 「マジック・リアリズムとはなにか」『幻想文学講義：幻想文学インタビュー集成』東雅夫編 国書刊行会 2012年.
- 『随想 2011』「そして生は続く」日本経済新聞社、2012年 264-468. (初出日本経済新聞 2011年10月30日)
- 『日本の作家が語る ボルヘスとわたし』(編著) 岩波書店 2011年.
- 『メキシコ美の巨星たち—その多彩でユニークな世界』(編著) 東京堂出版 2011年.
- 「中上健次『枯木灘』」『名作はこのように始まる II』ミネルヴァ出版 2008年.
- 「世界の中のドストエフスキー—ラテンアメリカ」『21世紀ドストエフスキーがやってくる』集英社 2007年.
- 「語りと声」『翻訳家の仕事』岩波書店、2006年. (初出岩波書店 2004年『図書』)
- 「ラテンアメリカの文学」「ラテンアメリカの映画」『ラテンアメリカ研究への招待 [改訂新版]』国本伊代・中川文雄編 新評論 2005年.
- 『マジカル・ラテン・ミステリー・ツアー』五柳書院 2003年.
- 「二つの幻視された過去—ロルカとネルーダ」『岩波文学講座 10：政治への挑戦』岩波書店 2003年.
- 『マイノリティは創造する』(共編著)「マイノリティの見え方—ラテンアメリカ文学の冒険」せりか書房、2000年
- 「小説は生きている」「奇跡の小説」「マヌエル・プイグ：マイノリティーたちの愛」『週間朝日百科世界の文学 47 南北アメリカ II』(編著) 朝日新聞社 2000年.
- 「ボルヘス：ポストモダンの教祖」「ボルヘス：ブエノスアイレスの熱狂」「ネルーダ：すべてを詩に変えるミダス王」「ネルーダ：愛を歌う詩人」『週間朝日百科世界の文学 37 南北アメリカ I』(編著) 朝日新聞社 2000年.
- 「チリ文学の特質—小説を中心に」『チリの選択・日本の選択』 毎日新聞社 1999年.
- 「世界の作家たち：フェルナンド・ソラナス」『セントラル・ステーション』・『100人の子供たちが列車を待っている』・『オフィシャル・ストーリー』・『地下の民』『ワールド・シネマ!』フィルムアート社 1999年.
- 「マドリッド古本探しの旅」『世界古本探しの旅』朝日新聞社 1998年.
- 「解説」集英社『村上龍自選小説集 3 寓話としての短編』 1997年.
- 「青春と成熟のはざま」『中上健次全集』(月報) 集英社 1996年.
- 『ラテンアメリカ事典』ラテンアメリカ協会 1996年.
- 「アナ・リディア・ベガ」「ガルシア=マルケス」『世界 X 現在 X 文学 作家ファイル』(共編著) 国書刊行会、1996年.
- 「カリブ海地域」『激動の文学』信濃毎日新聞 1995年.
- 『ラテンにキスせよ』自由国民社 1994年.
- 「大衆文学の形式を取り入れた先駆者：マヌエル・プイグ」『世界の文学 19』集英社 1990年.
- 解説「北杜夫『輝ける碧き空の下で』第二部 (下)」新潮社 308-314 1989年.
- 『越境するラテンアメリカ』パルコ出版 1989年.
- 「ラテンアメリカの文学」「ラテンアメリカの映画」『ラテンアメリカ研究への招待』国本伊代・中川文雄編 新評論 1997年.

「ラテンアメリカの文学」『ラテンアメリカハンドブック』講談社 1985年.

■「大いなる母の世界—ガルシア=マルケスの作品にみる女性像」『ラテンアメリカ社会と女性』新評論 1985年.

『ラテンアメリカ文学案内』（共編著）冬樹社 1984年.

『ディズニー世界の国々：社会と自然3 中央・南アメリカ』講談社 1978年.

## 2. 翻訳

### 単行本

『2666』ロベルト・ボラーニョ（共訳）白水社 2012年.

「青い目の花束」「見知らぬふたりへの手紙」『ラテンアメリカ五人集』オクタビオ・パス 集英社 2011年.

『低開発の記憶』エドムンド・デスノエス 白水社 2011年.

『蜘蛛女のキス』マヌエル・プイグ 集英社 2011年.

『七つの夜』J・L・ボルヘス 岩波文庫 2011年.

『絆と権力』アンヘル・エステバン、ステファニー・パニチェリ 新潮社 2010年.

「波との生活」『世界文学全集 3-05：短篇コレクション1』池澤夏樹編 河出書房新社 2010年.

「波との生活」『生の深みを覗く 岩波文庫別冊 20』中村邦生編 オクタビオ・パス 岩波書店 2010年.

『エル・スール』アデライダ・ガルシア=モラレス（共訳）インスクリプト 2009年.

『愛しのグレンダ』フリオ・コルタサル 岩波書店 2008年.

『予告された殺人の記録』ガブリエル・ガルシア=マルケス（『予告された殺人の記録 十二の遍歴の物語』所収）新潮社 2008年.

『マチュピチュの頂』パブロ・ネルーダ 書肆山田 2004年.

『フリアとシナリオライター』マリオ・バルガス=リョサ 国書刊行会 2004年.

『鷲か太陽か?』オクタビオ・パス 書肆山田 2000年.

『蝶の舌』マヌエル・リバス（共訳）角川書店 2001年.

『ブニュエル、ロルカ、ダリー果てしなき謎』アグスティン・サンチェス・ビダル（共訳）白水社 1998年.

『予告された殺人の記録』ガブリエル・ガルシア=マルケス（文庫版）新潮社 1997年.

『七つの夜』ホルヘ・ルイス・ボルヘス みすず書房 1997年.

『サッカーと11の寓話』カミロ・ホセ・セラ（共訳）朝日新聞社 1997年.

『南国に日は落ちて』マヌエル・プイグ 集英社 1996年.

『隣の庭』ホセ・ドノソ（共訳）現代企画室 1996年.

『苺とチョコレート』セネル・パス 集英社 1994年.

『赤い唇』マヌエル・プイグ（文庫版）集英社 1994年.

『蜘蛛女のキス』（戯曲版）劇書房 1994年.

『赤い唇』マヌエル・プイグ 『ギャラリー世界の文学 19 ラテンアメリカ』集英社 1990年.

『パラカスでジミーと』アルフレード・ブライス=エチェニケ 『ギャラリー世界の文学 19 ラテンアメリカ』集英社 1990年.

「時間」アンドレス・オメロ=アタナシウ 『ギャラリー世界の文学 19 ラテンアメリカ』集英社 1990年.

『蜘蛛女のキス』マヌエル・プイグ（文庫版）集英社 1988年.

「アフリカ音楽の帰還」ギリエルモ・カブレラ=インファンテ（『事典ラテンアメリカの音楽』所収）冬樹社 1984年.

『ラ・カテドラルの対話』マリオ・バルガス=リョサ（共訳）集英社 1984年.

『幾たびもペドロ』A・ブライス=エチェニケ 集英社 1983年.

『蜘蛛女のキス』マヌエル・プイグ 集英社 1983年.

『予告された殺人の記録』ガブリエル・ガルシア=マルケス 新潮社 1983年.

- 「マチュピチュの頂」パブロ・ネルーダ『世界の文学 37：現代詩集』篠田一士編 集英社 1979年。  
 『ボルヘスとの対話』 G・シャルボニエ (共訳) 国書刊行会 1978年。  
 『子犬たち/ボスたち』 マリオ・バルガス=リョサ (共訳) 国書刊行会 1978年。  
 『スペイン伝奇作品集』 G・A・ベッケル (共訳) 創土社 1977年。

## 雑誌掲載

- 「文学への情熱ともうひとつの現実の創造」 マリオ・バルガス=リョサ『すばる』集英社、2012年10月。  
 「マリオ・バルガス=リョサ氏 謝辞」『日本経済新聞』2011年7月。  
 「二十の愛の詩と一つの絶望の詩」ほか パブロ・ネルーダ『るしおる』書肆山田 2005年3月。  
 「ある詩人」他 オクタビオ・パス『るしおる』42 書肆山田 2001年1月。  
 「未来の賛歌」他オクタビオ・パス『るしおる』41 書肆山田 2000年9月。  
 「ノーベル賞作家は、麻薬国家を救えるのか？(ジョン・リー・アンダーソンによるインタビュー)」  
 G・ガルシア=マルケス『プレイボーイ』書肆山田 2000年5月。  
 「ドイツで見た夢」他四篇 ホルヘ・ルイス・ボルヘス『すばる』集英社 1999年9月。  
 「出発」他 オクタビオ・パス『るしおる』39 書肆山田 1999年。  
 「子供のいる庭」他オクタビオ・パス『るしおる』38 書肆山田 1999年。  
 「物語の情熱」アナ・リディア・ベガ『群像』講談社 1997年9月。  
 「オクタビオ・パス講演」オクタビオ・パス『慶応義塾大学日吉紀要』1994年9月。  
 「Gabo Talks ガルシア=マルケス、「カストロ神話を語る」(インタビュー)」G・ガルシア=マルケス UPU『エスクァイヤ』1991年9月。  
 「眠る前に」オクタビオ・パス(共訳)『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 「素晴らしい意志」オクタビオ・パス(共訳)『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 「青い目の花束」オクタビオ・パス『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 「出会い」オクタビオ・パス『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 「詩、神話、革命」オクタビオ・パス『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 「困難な修行」オクタビオ・パス(共訳)『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 「見知らぬふたりへの手紙」オクタビオ・パス(共訳)『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 「急ぐ男」オクタビオ・パス(共訳)『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 「イスパノアメリカ文学の近代性」オクタビオ・パス『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 「ある書記の幻想」オクタビオ・パス(共訳)『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 『内なる樹』(抄訳) オクタビオ・パス『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 「透明なこだま」オクタビオ・パス『中央公論文芸特集』中央公論社 夏季号 1991年。  
 「千夜一夜物語」ホルヘ・ルイス・ボルヘス『みすず』みすず書房 1991年5月。  
 「フィデル=カストロ、語りの魔術」G・ガルシア=マルケス『すばる』集英社 1991年2月。  
 「風と潮に抗って III」バルガス=リョサ『中央公論』中央公論社 春季号 1991年。  
 「盲目について II」ホルヘ・ルイス・ボルヘス『みすず』みすず書房 1990年12月。  
 「盲目について I」ホルヘ・ルイス・ボルヘス『みすず』みすず書房 1990年11月。  
 「ポジット・チキン」アナ・リディア・ベガ『新潮』新潮社 1990年9月。  
 「カリブの空は曇り空」アナ・リディア・ベガ『新潮』新潮社 1990年9月。  
 「人の声には美が潜んでいる(来日講演)」マヌエル・プイグ『すばる』集英社 1990年7月。  
 「人生最大の危機」セーサル・バジェッホ『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1990年3月。  
 「ボーバル」ルイス・リョレンス『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1990年2月。

- 「明星」レオポルド・ルゴーン『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1990年1月。  
「宿命の対談（バルガス=リヨサ）との対談」G・ガルシア=マルケス UPU 『エスクァイア日本版別冊 TIERRA』 1990年1月。  
「秋の歌（抒情詩集）10」ルベン・ダリオ 日本放送出版協会 『NHK テレビスペイン語講座』 1989年10月。  
「少年と月」マリアノ・ブルー『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1989年10月。  
「トゥリルセ LXI」セーサル・バジェッホ『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1989年9月。  
「ぼくの騎士」ホセ・マルティ『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1989年8月。  
「カフェ」エバリスト・カリエゴ『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1989年7月。  
「妖精」リカルド・ハイメス=フレイレ『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1989年6月。  
「ミッドナイト・ドリームズ」ホセ・アスンシオン・シルバ『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1989年5月。  
「パティオ」ホルヘ・ルイス・ボルヘス『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1989年3月。  
「わたしの仏教」ホルヘ・ルイス・ボルヘス『ユリイカ』青土社 1989年3月。  
「おなじく（キューバの少女に）」ルベン・ダリオ『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1989年1月。  
「マリリン・モンローのための祈り」エルネスト・カルデナル『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1988年12月。  
「センセマヤ」ニコラス・ギリエン『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1988年6月。  
「マチュピチュの頂 VI」パブロ・ネルーダ『NHK テレビスペイン語講座』日本放送出版協会 1988年5月。  
「フォルベス夫人の幸福な夏」G・ガルシア=マルケス『新潮』新潮社 1988年5月。  
「鏡面のように ニコラス・レイの晩年」ビクトル・エリセ 『リュミエール』筑摩書房 1987年7月。  
「パレードがはじまる」レイナルド・アレナス『現代詩手帖』思潮社 1987年6月。  
「ボルヘス追悼 「苦悩するラテン・アメリカの詩魂」」オクタビオ・パス『季刊アステイオン』TBS ブリタニカ 1987冬号 1987年6月。  
「悪夢」ホルヘ・ルイス・ボルヘス『すばる』集英社 1986年9月。  
「一番光る星アルトゥーロ」レイナルド・アレナス『現代詩手帖』思潮社 1986年3月。  
「エル・スール」ビクトル・エリセ シナリオ採録『プログラム』シネセゾン 1985年。  
「フスト=ホルヘ・パドロン小詩集」フスト=ホルヘ・パドロン『ユリイカ』青土社 1984年11月。  
「リナーレス夫妻に会うまで」アルフレード・ブライス=エチェニケ『ユリイカ』青土社 1983年7月。  
「パラカスでジミーと」アルフレード・ブライス=エチェニケ『すばる』集英社 1983年6月。  
「予告された殺人の記録」『新潮』新潮社 1983年2月6-71。  
「時間」アンドレス・オメロ=アタナシウ『すばる』集英社 1982年9月。  
「アンドレ・ブルトンあるいは起点の探求」オクタビオ・パス『ユリイカ臨時増刊』青土社 1981年5月。  
「万葉・枕・源氏」オクタビオ・パス『ユリイカ』青土社 1980年12月。  
「純なる魂」カルロス・フエンテス『海』中央公論社 1980年10月。  
「チャック・モール」カルロス・フエンテス『海』中央公論社 1980年10月。  
「パスの詩的空間」カルロス・フエンテス『現代詩手帖』思潮社 1980年9月。  
「芭蕉の詩学」オクタビオ・パス『ユリイカ』青土社 1980年5月。  
「批評について」オクタビオ・パス『カイエ』冬樹社 1979年10月。

- 「春の祭典（抄訳）」アレホ・カルペンティエール『カイエ』冬樹社 1979年10月。  
 「帰還」オクタビオ・パス『ユリイカ』青土社 1979年7月。  
 「新たなアナロジー 詩とテクノロジー」オクタビオ・パス『カイエ』冬樹社 1979年6月。  
 「麻薬と文学」オクタビオ・パス『カイエ』冬樹社 1979年5月。  
 「ブニュエルの哲学的映画」オクタビオ・パス『カイエ』冬樹社 1979年3月。  
 「ボルヘスとの対話」（2章）G・シャルボニエ『meme / Borges』エディシオン・エパーヴ（共訳）1975年。

### 3. 論文

- 「ロペ・デ・アギーレの表象をめぐって」現代文芸論研究室論集『れにくさ』（3）2012年。  
 「騎士の才知、従者の知恵—セルバンテスの諺」現代文芸論研究室論集『れにくさ』（1）2009年103-120。  
 「現代キューバの作家たちの文化的環境」『東京大学文学部次世代人文開発センター研究紀要 22』2009年13-19。  
 「引き裂かれたアイデンティティ」『立教大学ラテンアメリカ研究所報（25）』2003年53-69。  
 「幻想と知—アルゼンチン文学の魅力」京都外国語大学イスパニア語学科『日本=アルゼンチン修好百年記念論文集』2000年3月61-74。  
 「日本におけるアルゼンチン文学の受容」日本アルゼンチン協会『日本アルゼンチン交流史』1998年12月286-296。  
 「メキシコの饗宴の中で—新しい文学と映画の出会い」明治学院大学言語文化研究所『言語文化』1992年4月28-41。  
 「ガルシア=マルケスの三つの顔—文学・映画・ジャーナリズム」『立教大学ラテンアメリカ研究所報』1989年3月。  
 「ラテンアメリカ1920年代：作家の群像Ⅱ」上智大学イベロアメリカ研究所『イベロアメリカ研究』1981年5月14-28。  
 「ラテンアメリカ1920年代：作家の群像Ⅰ」上智大学イベロアメリカ研究所『イベロアメリカ研究』1981年4月16-33。  
 「スペイン現代詩の展開Ⅱ」『国際関係学研究』津田塾大学 1981年3月95-107。  
 「オクタビオ・パスのエロティシズム」思潮社『シュルレアリズムの詩』1981年1月228-234。  
 ■「1920年代におけるアブラと国際関係：主にアヤ・デ・ラ・トーレの活動を中心に」国際社会学研究会編『トランスナショナルな諸問題—国際関係論への新視角』1980年8月。  
 「スペイン現代詩の展開Ⅰ」津田塾大学『国際関係学研究』1980年3月43-46。  
 「1920年代におけるアブラと国際関係：主にアヤ・デ・ラ・トーレの活動を中心に」日本国際政治学会編『国際政治』1978年8月19-39。  
 「「黒き使者」と「トゥリルセ」における家・家族のテーマとその意味」日本イスパニヤ学会『イスパニカ』1977年10月101-114。  
 「パブロ・ネルーダと自然：水ないし海のイメージについて」『津田塾大学紀要』1977年3月131-145。  
 「詩と政治：パブロ・ネルーダの作品における政治詩の意味」津田塾大学『国際関係学研究』1977年3月53-58。  
 「パブロ・ネルーダと自然：農業的イメージについて」津田塾大学紀要 1976年3月117-126。  
 「パブロ・ネルーダの作品における象徴とその意味」『津田塾大学紀要』1975年3月。  
 「パブロ・ネルーダ：幼年期から青年まで」『詩人会議』1974年4月。

### 4. エッセイ・書評・その他

- 映画評「イーストウッドの目」（『人生の特等席』）『キネマ旬報』キネマ旬報社 2012年12月。  
 映画評「境界に分け入る」（『危険なメソッド』）『キネマ旬報』キネマ旬報社 2012年11月。

- 書評「ホルヘ・フランコ『パラíso・トラベル』(田村さと子訳 河出書房新社)『週間現代』2012年10月.
- 「新世紀世界文学ナビ:脱ラテンアメリカ主義」『毎日新聞』2012年9月.
- 「巻頭辞」『日本イスパニヤ学会会報』日本イスパニヤ学会 2012年9月.
- 「語りが生んだ記憶の町『千年の愉楽』『奇蹟』『熱風』『別冊太陽 中上健次』平凡社 2012年8月.
- 「新世紀世界文学ナビ:ロベルト・ボラーニョ」『毎日新聞』2012年8月.
- 「新世紀世界文学ナビ:ブライス=エチェニケ」『毎日新聞』2012年8月.
- 「新世紀世界文学ナビ:エドモンド・デスノエス」『毎日新聞』2012年8月.
- 「新世紀世界文学ナビ:セネル・パス」『毎日新聞』2012年8月.
- 「新世紀世界文学ナビ:エレナ・ポニアトウスカ」『毎日新聞』2012年7月.
- 「追想録 カルロス・フエンテスさん」『日本経済新聞夕刊』2012年6月.
- 「私の平成ナンバーワン女優」『文藝春秋』文藝春秋社 2012年5月.
- 映画評「バロックとメビウスの輪」(『私が、生きる肌』)『キネマ旬報』5月下旬号 2012年5月.
- 「新世紀世界文学ナビ:レオナルド・パドゥーラ」『毎日新聞』2012年5月.
- 「メキシコとは 追い続け 作家カルロス・フエンテスを悼む」『朝日新聞』2012年5月.
- 書評「マリオ・バルガス=リョサ『悪い娘の悪戯』(八重樫克彦・八重樫由貴子訳 作品社)『週刊現代』2012年4月.
- 書評「カルロス・フエンテス『澄みわたる大地』(寺尾隆吉訳)『日本経済新聞』2012年4月.
- 「映像をめぐる言葉」恵比寿映画祭 WEB 2012年3月.
- 「読者アンケート特集」『みすず』みすず書房 2012年 82-83.
- 「ラテンアメリカ文学—ポスト・ブームを越えて」『東京大学広報誌 淡青』25 2011年10月.
- 「そして生は続く」『日本経済新聞』2011年10月30日.
- 「バルガス=リョサ『ケルト人の夢』世界の文学—ラテンアメリカ」『東京新聞』2011年7月.
- 「ラテンアメリカ文学とポリバル」『シモン・ポリバル 夢の断片』劇場文化 2011年7月.
- 「特集:マリオ・バルガス=リョサ氏に名誉博士号を授与」『東京大学 学内広報』No. 1414. 2011年7月.
- 「学科紹介 現代文芸論専修課程」『東京大学新聞』2011年5月.
- 書評「田村さと子『百年の孤独を歩く』河出書房新社」『宮崎新聞』他 2011年5月.
- 書評「イグナシオ・ラモネ『フィデル・カストロ—みずから語る革命家人生』(伊高浩昭訳 岩波書店)『ラティーナ』ラティーナ 2011年4月.
- 書評「エベリオ・ロセーロ『顔のない軍隊』(八重樫克彦・八重樫由貴子訳 作品社)『日本経済新聞』2011年3月.
- コラム「世界の酒と文学 酒はうまさの証拠」『yomyom』3月号 Vol. 19 新潮社 2011年2月.
- 「愛する人 繋がり回復」劇場用プログラム『愛する人』ファントム・フィルム 2011年1月.
- 「ノーベル文学賞バルガス=リョサ氏の魅力」『朝日新聞』2010年10月.
- 「サルト・モルタル—決死の飛躍」『進学ガイダンス』東京大学 2010年.
- 「小説と映画のはざま」劇場用プログラム『瞳の奥の秘密』ロングライド 2010年8月.
- 書評「ロベルト・ボラーニョ『野生の探偵たち』柳原孝敦・松本健二訳(白水社)『日本経済新聞』2010年5月.
- 座談「特集・ボルヘス 鼓直、野谷文昭、細野豊」『詩と思想』286号 土曜美術社 2010年7月.
- 「青春の一冊 書かれなかった章 ジーン・フランコ『ラテンアメリカ—文化と文学—苦悩する知識人』」『東大新聞』2010年3月.
- 書評「マリオ・バルガス=リョサ『嘘から出たまこと』寺尾隆吉訳(現代企画室)『日本経済新聞』2010年3月.
- 文庫解説 辻仁成『ピアノシモ・ピアノシモ』文藝春秋 2010年3月.
- 「世界の文学・ラテンアメリカ ガルシア=マルケス 伝記と新たな読み」『東京新聞』2010年1月.
- DVD解説「対立と和解—小説から映画へ」『蜘蛛女のキス』紀伊国屋書店 2010年.
- 「ビートルズとキューバの感性」東京大学現代文芸論研究室論集『れにくさ』(2)2009年.
- 「海外文学・文化 2009回顧・ラテンアメリカ」『図書新聞』2009年12月.

- 書評「ガブリエル・ガルシア=マルケス『生きて、語り伝える』旦敬介訳（新潮社）」『日本経済新聞』2009年12月.
- 書評「佐竹謙一『概説スペイン文学史』（研究社）」『週間読書人』読書人 2009年10月.  
「大地の力」劇場用プログラム『あの日、欲望の大地で』東北新社 2009年9月.  
「 gaucho の現代性と普遍性」『カフェ古典新訳文庫 Vol. 1』（再録「gaucho の現代性と普遍性」『古典新訳の発見 3』光文社 2009年5月）.
- 書評「ロベルト・ボラーニョ『通話』」松本健二訳（白水社）」『日本経済新聞』2009年7月  
「巻頭エッセイ 批評の空間」『他分野交流プロジェクト研究ニーズレター Vol. 61』東京大学人文社会系研究科 2009年7月.
- 書評「堀尾真紀子『フリーダ・カーロとディエゴ・リベラ』（ランダムハウス講談社）」『季論 21』2009年夏号 木の泉社 2009年7月.  
「gaucho の現代性と普遍性」『古典新訳の発見 3』光文社 2009年5月.
- 書評「マルコス・アギニス『マラーノの武勲』八重樫克彦・八重樫由貴子訳（作品社）」『日本経済新聞』2009年4月.
- 書評「室井光広『ドン・キホーテ讃歌—世界文学練習帖』（東海大学出版）」『週間読書人』読書人 2009年2月.  
「現代キューバの作家たちと文化的環境」『東京大学文学部次世代人文開発センター研究紀要 22』2009年.  
「評論 エリセの聖なる映画」DVD-BOX ビクトル・エリセ 特別ブックレット 2008年12月.  
「対談 井口奈巳 野谷文昭：ビクトル・エリセの映画」DVD-BOX ビクトル・エリセ 特別ブックレット 2008年12月.  
「チェ 28歳の革命／チェ 39歳別れの手紙」『T』TOHO シネマズ 2008年 Winter.  
「シンポジウム『百年の孤独』を超えて 桜庭一樹＋野谷文昭＋柴田元幸＋沼野充義」『すばる』集英社 2008年12月.  
「宿命と意思」『日曜日の随想 2008』日本経済新聞社 2009年4月.（再録「意思と宿命」『日本経済新聞』2008年3月）  
「記憶の継承」『群像』講談社 2008年10月.
- 書評「上野清士『ラス・カサスへの道』（新泉社）」『日本経済新聞』2008年9月.
- 書評「柳原孝敦『ラテンアメリカ主義のレトリック』（エディマン／新宿書房）」『日本イスパニヤ学会会報 13号』2008年9月.  
「翻訳と所作」『早稲田の片隅で—16号館に集った教師と学生たち』岡田浩平編 三元社 2008年7月.  
「ロマンティズムのリアリティー」劇場用プログラム『コレラの時代の愛』ギャガ 2008年6月.
- 書評「アレイダ・マルチ『わが夫、チェ・ゲバラ』後藤政子訳 朝日新聞出版」『日本経済新聞』2008年6月.
- 書評「長野まゆみ『カルトローレ』」『新潮』新潮社 2008年6月.
- 映画評「シネマ万華鏡 『今夜、列車は走る』」『日本経済新聞』2008年4月.
- CD解説『想いの届く日』大萩康司 2008年4月.  
「カストロ時代の終焉と文学」『東京新聞』2008年3月.  
「スペイン・ラテンアメリカ文学」の項 『広辞苑 第六版』岩波書店 2008年1月.  
「意思と宿命」『日本経済新聞』2008年3月.  
「善のなかの恐怖」『図書』岩波書店 2008年3月.  
「物語の変貌を知る愉しみ」劇場用プログラム『蜘蛛女のキス』阪急コミュニケーションズ 2007年11月.  
「新訳『ドン・キホーテ』」『朝日新聞』2007年10月.  
「異本としての『エレンディアラ』」『悲劇喜劇』No. 683. 早川書房 2007年9月.  
「神話の復権—ガルシア=マルケスとラテンアメリカ文学」劇場用パンフレット『エレンディアラ』ホリプロ 2007年9月.  
「世界の文学：サンティアゴ・ロンカグリオロ『赤い四月』、バルガス=リョサ『バッド・ガールの



- 悪戯』—影落とオゲリラの存在』『東京新聞』2007年7月。  
「世界の中のドストエフスキー ラテンアメリカ」『21世紀ドストエフスキーがやってくる』集英社 2007年6月（再録「ラテンアメリカ作家とドストエフスキー『すばる』集英社 2007年。文庫解説『グッピー・クッキー』堂垣園江 光文社 2007年6月。  
「ラテンアメリカ文学」『文芸年鑑2006』日本文藝家協会編 新潮社 2007年6月。  
「映画の記憶がもたらす厚みの強度」劇場用プログラム『低開発の記憶—メモリアス—』Action Inc. 2007年5月。  
「バベル」『複合文化通信』第7号 早稲田大学 2007年3月。  
「チカーノ・ロック「ラ・バンバ」」『複合文化通信』第4号 早稲田大学 2007年1月。  
「ラテンアメリカ作家とドストエフスキー」『すばる』集英社 2007年4月。  
「巻頭辞」『日本イスペインヤ学会会報』2007年2月。  
書評「G・ガルシア＝マルケス『コレラの時代の愛』木村榮一訳」『すばる』集英社 2007年1月。  
「ボルヘスから受け継がれる、知的幻想の遺産」『フィガロジャポン』阪急コミュニケーションズ 2007年1月。  
「世界見聞録第13回 キューバと野球」『早稲田ウィークリー』2006年11月。  
「沸き上がる生命力」『メキシコ・ドキュメンタリー映画祭』メキシコ・ドキュメンタリー映画祭実行委員会 2006年10月。  
「マリア・フェリックスの肖像」『Cartier News Letter』第16号 2006年8月。  
解説『糧なき土地』『皆殺しの天使』『ビリディアナ』『アンダルシアの犬』『ブルジョワジーの密かな愉しみ』『自由の幻想』『欲望の曖昧な対象』『哀しみのトリスターナ』『小間使いの日記』『ミツバチのささやき』『エル・スール』『マルメロの陽光』『アルチバルド・デラクルスの犯罪的人生』『ライブ・フレッシュ』劇場用パンフレット『BOW30映画祭特別プログラム』フランス映画社 2006年7月。  
「世界の文学 セルヒオ・ラミレス『千一の死』推理で解き明かす人の多面性」『東京新聞』2006年6月。  
解説「思考する版画『星野美智子全版画集』安部出版株式会社 2006年6月。  
「今を読み解く—サッカーは地域の鏡」『日本経済新聞』2006年6月。  
文庫解説「ねじめ正一『万引き天女』集英社 2006年3月。  
「海外の文学『族長の秋』の映画化について」『毎日新聞』2006年1月。  
「父子の背中が語ること」劇場用プログラム『僕と未来とブエノスアイレス』ハピネット・ピクチャーズ 2006年1月。  
書評「小説にしか言えないこと『カーテン 7部構成の小説論』ミラン・クンデラ（西永良成訳）『文学界』文藝春秋社 2006年。  
「ラテンアメリカの現実を背負った幻想性」『文学界』文藝春秋社 2006年。  
「ブニュエル講座第一回文学篇」『ルイス・ブニュエルDVD-BOX1』2006年。  
調査報告「哀愁のリトル・ハバナ」『「人の移動と文化変容」研究センターNewsletter』No.13. 立教大学 2006年。  
「'05—ラテンアメリカ文学の現状と翻訳・研究」『文芸年鑑』日本文藝家協会 2006年。  
「(薦!—若手・新任教員によるおススメ!) エルネスト・チェ・ゲバラ著 棚橋加奈江訳『早稲田ウィークリー』2006年。  
「ブニュエル、エリセ、アルモドバル」『BOW30映画祭特別プログラム』2006年。  
「岡本太郎とメキシコ」『sai アートラボ(0002)』2006年。  
「世界見聞録13回 キューバと野球」『早稲田ウィークリー』2006年。  
書評「G・ガルシア＝マルケス『わが悲しき娼婦たちの思い出』」『フィガロ・ジャポン』阪急コミュニケーションズ 2006年。  
解説「現実とフィクションの戦い」『パズルの迷宮』ファン・ボニーリャ著（碓順治監訳）朝日出版社 2005年11月。  
書評「辻仁成『アカシア』」『週刊文春』文藝春秋社 2005年10月。  
「ネットと贋作」『すばる』集英社 2005年8月。

- インタビュー “Amor a la japonesa” *Internacional Press*, 2 de julio de 2005 2005年7月。  
「世界の文学 C・フエンテスの評論集『反ブッシュ』—知的アメリカへの敬意と挫折』『東京新聞』  
2005年7月。  
「ドン・キホーテとサンチョの変貌（再録）」劇場用プログラム バレエ『ドン・キホーテ』新国立劇場運営財団 2005年6月。  
「叫びから内なる声へ「新しいチカーノ文学」の語り口」思潮社『現代詩手帖』2005年5月 60-63。  
書評「ル・クレジオ『歌の祭り』（管啓次郎訳）」『日本経済新聞』2005年4月。  
「ボルヘス会第5回大会」『すばる』集英社 2005年4月。  
「二重の愛の詩と一つの絶望の詩 他」『るしおる』書肆山田 2005年3月。  
「穏やかな肯定」劇場用プログラム『永遠のハバナ』Action Inc. 2005年。  
「キャロルの眼差し」劇場用プログラム『キャロルの初恋』東京テアトル 2005年。  
「軍政とトラウマ」劇場用プログラム『ブエノスアイレスの夜』アットエンタテイメント 2004年  
12月。  
インタビュー「革命とハリウッドの間で揺れるラテンアメリカ映画」『タイトル』文藝春秋社 2004  
年12月。  
インタビュー「『モーターサイクル・ダイアリーズ』革命家ゲバラの原点を描くラテンアメリカ放  
浪の旅」『ドマーニ』小学館 2004年11月。  
「インタビュー セネル・パス 寛容さを学ぶこと～レオナルド・パドゥーラ 政治的レトリック  
を超えて」『すばる』（特集：チェ・ゲバラとキューバ文学の挑戦）集英社 2004年11月。  
「ミッシングリンクとしての七〇年代」『すばる』（特集：チェ・ゲバラとキューバ文学の挑戦）集  
英社 2004年11月。  
「グローバル化の中のラテンアメリカ文化」『立教大学ラテンアメリカ研究所創設40周年記念号』  
2004年10月。  
「アメリカ大陸人ゲバラ 映画『モーターサイクル・ダイアリーズ』から」『公明新聞』2004年10  
月。  
「語りと声」『図書』岩波書店 2004年10月（2006年『翻訳家の仕事』岩波書店収録）。  
インタビュー「翻訳—情熱と冷静、ことばの置きかえによる魔術」『國文學』學燈社 2004年9月。  
「可視のボルヘスから不可視のボルヘスへ—「迷宫忌」特別講演会レポート」集英社『すばる』2004  
年9月。  
書評「和田忠彦『声、意味ではなく—わたしの翻訳論』」『東京新聞』2004年8月。  
書評「堂垣園江『うつくしい人生』」『新潮』新潮社 2004年7月。  
「インカと古都とインターネット」『Newsletter』No.5 立教大学 2004年7月。  
「授業探訪 グローバル化のなかのラテンアメリカ」立教大学『大学教育研究フォーラム』2004年  
3月。  
「ボルヘス会第四回大会報告—ボルヘスの省略法を巡って」『すばる』集英社 2004年3月。  
「愛の証明と突然性」劇場用プログラム『ある日、突然』ザジフィルムズ 2004年。  
「巻頭言—ちりも積もれば」『イスパニア図書』秋（7）行路社 2004年。  
「永遠のカリスマ チェ・ゲバラ」『キネマ旬報』キネマ旬報社 2004年。  
「カレイドスコープのもたらす眩暈」劇場用プログラム『靴に恋して』エレガント・ピクチャー2004  
年。  
「見出された時」講談社『群像』2004年。  
「世界の文学 キューバ」『東京新聞』2004年。  
「パブロ・ネルーダ生誕100周年 言葉の強度と美しさ」『読売新聞』2004年。  
「キューバ新世代作家が語る文学の可能性 セネル・パス/レオナルド・パドゥーラ」集英社『すば  
る』2004年。  
「私、あなた、彼ら—共生の可能性を求めて」劇場用プログラム『私の小さな楽園』シネカノン 2003  
年12月。  
「第21回例会報告「スペイン+イスマノアメリカの文学」の最前線から」『イスパニヤ学会会報  
第23回』2003年11月。

- 「シンポジウム フォークナーと中上健次」野谷文昭・浅田彰・いとうせいこう他『早稲田文学』  
2003年11月4-39.
- 「運からの解放」劇場用プログラム『10億分の1の男』日本 Herald 2003年9月.
- 「ビバ・ラ・ビダー生命万歳」劇場用プログラム『フリーダ』アスマック・エース 2003年8月.
- 「ボルヘス会第三回大会報告」『すばる』集英社 2003年5月.
- 書評「堂垣園江『ライオン・ダンス』」『すばる』集英社 2003年4月.
- 「見出された時」『群像』講談社 2003年3月.
- 「ガルシア=マルケスの偽文書」『毎日新聞』2003年3月.
- 「都市とディアスポラと寛容さ」プロモアルテ（セシリア・カストロ・ガルシア個展）2003年1月.
- 「'02—ラテンラテンアメリカ文学の現状と翻訳研究」日本文藝家協会『文藝年鑑』2003年.
- 「読むラテンと踊るラテン 野谷文昭+山崎美恵子」『資生堂 WORD』2002年12月.
- 「新世代作家とその文学—自国の現実を再発見」『キューバを知るための52章』所収 明石書店  
2002年12月.
- インタビュー「ホルヘ・エドワーズ」『すばる』集英社 2002年10月.
- 「只今翻訳中 オクタビオ・パス『鷲か太陽か?』」『東京新聞』2002年10月.
- 書評「ジェームズ・ウッドル『ボルヘス伝』（平野幸彦訳）」『日本経済新聞』2002年9月.
- 「〈現在〉の重み、そして輝き」劇場用プログラム『天国の口、終わりの楽園』ギャガ・コミュニ  
ケーションズ 2002年8月.
- 書評「イサベル・アジェンデ『パウラ、水泡なすもろき命』（管啓次郎訳）」『日本経済新聞』2002  
年8月.
- 「詩人の仕事」『るしおる』書肆山田 2002年8月.
- 対談「第20回『いのちとかたち』を読む—ラテンアメリカの世界について」中上健次資料収集委  
員会『いのちとかたち』（山本健吉著）2002年6月.
- 「ドン・キホーテとサンチョの変貌」新国立バレエ公演「ドン・キホーテ」2002年5月.
- 「マラドーナの栄光と悲惨」『群像』講談社 2002年4月.
- 「世界の文学—アルゼンチン、チリ」『東京新聞』2002年4月.
- 座談「二十世紀文学を超えて」野谷文昭+柴田元幸+沼野充義+三浦雅士『大航海』新書館 2002  
年2月.
- 「パロック都市と人間模様」劇場用プログラム『アモーレス・ペロス』メディアボックス 2002年  
2月.
- 「ユートピアの記憶」劇場用プログラム『バスを待ちながら』シネカノン 2002年1月.
- 「愛の物語の魔力」劇場用プログラム『セレンディピティ』アムーズピクチャーズ 2002年.
- 「『鷲か太陽か?』あるいは〈他者〉の探求」『iichiko』No. 76 2002年.
- 「地中海の聖と俗」劇場用プログラム『マルティナは海』LIBERO 2002年.
- 「移動・亡命・ディアスポラ—キューバの新しい世代」『國文学』學燈社 2002年8月.
- 書評「ハビエル・マリアス『白い心臓』（有本紀明訳）」『日本経済新聞』2001年12月.
- 「山のあなたの空遠く」『朝日新聞』2001年12月.
- 「私は〇〇系」『リテラール別冊 今年読む本いち押しガイド』メタローグ 2001年12月.
- 「シンポジウム『千年の愉楽』から『奇跡』へ」『早稲田文学』2001年11月.
- 「キューバ文学を求めて（「キューバにひかれて」9）」NHK出版協会『NHK テレビスペイン語会話』  
2001年11月.
- 「キューバ映画と私（「キューバにひかれて」8）」NHK出版協会『NHK テレビスペイン語会話』2001  
年10月.
- 「国境の北、大陸の西」『日本経済新聞』2001年9月.
- 「『ヴァージン・ハンド』あるいはボーダー文化の豊かさ」劇場用プログラム『ヴァージン・ハン  
ド』アートポート/アースライズ 2001年9月.
- 書評「A・D・オルティス『エビータの真実』（竹澤哲訳）」文藝春秋社『週刊文春』2001年8月.  
「スペイン映画『蝶の舌』を見て」『読売新聞』2001年8月.
- インタビュー「ロドリゴ・ガルシア監督 都会の孤独とおとぎばなし」『すばる』集英社 2001

- 年7月.
- 書評「アレホ・カルペンティエール『春の祭典』(柳原孝敦訳)『日本経済新聞』2001年6月.
- 書評「ジョゼ・サラマーゴ『白の闇』『共同通信』2001年3月.
- 「ウォン・カーウアイとラテンアメリカの影」『期待の映像作家シリーズ ウォン・カーウアイ』キネマ旬報社 2001年3月.
- 書評「西谷修『世界史の臨界』『日本経済新聞』2001年2月.
- 書評「上野健太郎『スペインハプスブルグ カルロス四世の旅』『立教』(176)2001年.
- 「都会の孤独とおとぎばなし」劇場用プログラム『彼女を見ればわかること』ギャガコミュニケーションズ 2001年.
- 「幼き日々の思い出」劇場用プログラム『蝶の舌』アスミック・エース・エンタテイメント 2001年.
- 「そして船はゆく」劇場用プログラム『夜になるまえに』アスミック・エース・エンタテイメント 2001年.
- 「アレナスの魔術的リアリズム」『ユリイカ』青土社 2001年9月.
- 「地球はまわる」『毎日新聞』2000年12月～2002年12月連載.
- 「第1回ボルヘス会レポート・ボルヘス会の新たな出発」『すばる』集英社 2000年12月.
- 書評「バルガス=リョサ『若い小説家に宛てた手紙』『図書新聞』図書新聞 2000年10月.
- 「失われた映画館」『群像』講談社 2000年10月.
- 「ガンジー書店、二階のカフェで」『すばる』集英社 2000年9月号.
- 書評「バルガス=リョサ『若い小説家に宛てた手紙』『日本経済新聞』2000年9月.
- 座談「徹底討議ブニェルに祝福のキスを 野谷文昭+金谷重朗+金井美恵子」『ユリイカ』青土社 2000年9月.
- インタビュー「エレナ・ポニアトウスカ」『すばる』集英社 2000年9月.
- 「ブニェルのメキシコ時代」『毎日新聞』2000年9月.
- 対談「第13回三島由紀夫賞受賞記念対談星野智幸+野谷文昭ラテンアメリカとの混血へ!」『新潮』新潮社 2000年7月.
- 「サン・アンヘル of 石畳」『すばる』集英社 2000年7月.
- 書評「星野智幸『目覚めよと人魚は歌う』『日本経済新聞』2000年7月.
- 書評「池澤夏樹『花を運ぶ妹』『日本経済新聞』2000年5月.
- 「アルモドバルの総て—女性賛歌」劇場用プログラム『オール・アバウト・マイ・マザー』ギャガ・コミュニケーションズ 2000年2月.
- 書評「バルガス=リョサ『官能の夢』(西村英一郎訳)『四国新聞』2000年1月.
- 「予告された死の衝撃」劇場用プログラム『ロルカ、暗殺の丘』ギャガ・コミュニケーションズ 2000年1月.
- 「ラテンアメリカ文学の現況と翻訳・研究 '99」『文藝年鑑』日本文藝家協会 2000年.
- 「愛を歌う詩人」朝日新聞社 『週間朝日百科世界の文学 37 南北アメリカ I』2000年.
- 「作家たちは南アメリカを再発見し、新たな現実を作ろうとした」朝日新聞社 『週間朝日百科世界の文学 37 南北アメリカ I』2000年.
- 「ポストモダンの教祖」朝日新聞社 『週間朝日百科世界の文学 37 南北アメリカ I』2000年 196-198.
- 「ブエノスアイレスの熱狂」朝日新聞社 『週間朝日百科世界の文学 37 南北アメリカ I』2000年 199.
- 「すべてを詩に変えるミダス王」朝日新聞社 『週間朝日百科世界の文学 37 南北アメリカ I』 2000年.
- 「小説は生きている」朝日新聞社 『週間朝日百科世界の文学 47 南北アメリカ II』2000年.
- 「奇跡の小説」朝日新聞社 『週間朝日百科世界の文学 47 南北アメリカ II』(47)2000年.
- 『「楡家の人々」と南の年代記』世田谷文学館開館5周年記念北杜夫展 2000年.
- 「サルサは危険なリズム」『キネマ旬報』キネマ旬報社 2000年.
- 「真紅の愛」劇場用プログラム『真紅の愛』ケイブルホーグ 2000年.
- 「ボルヘスと百科事典」『図書』岩波書店 1999年11月号.
- 書評「マヌエル・プイグ『グレタ・ガルボの眼』(堤康徳訳)『高知新聞』1999年11月.

- 書評「チャールズ・エリオット『英国ガーデニング物語』（中野春夫訳）」『翻訳の世界』バベル・プレス 1999年11月。
- 対談「火と代数の文学 高山宏+野谷文昭」『ユリイカ』青土社 1999年9月。
- 文庫解説「藤沢周『ブエノスアイレス午前零時』」河出書房 1999年9月。
- 「思考の笑い—ボルヘス生誕百年によせて」『新潮』新潮社 1999年9月。
- 「ボルヘス生誕100年」『共同通信』1999年8月。
- 『「黒猫・白猫」カーニバルの復活と〈世界〉への復帰』『キネマ旬報』キネマ旬報社 1999年8月。
- 「パス」『ブリタニカ国際年鑑』1999年版 TBS ブリタニカ 1999年4月。
- 「特別レポート 強烈な官能性—現代キューバ文化概観」『ブリタニカ国際年鑑』1999年版 TBS ブリタニカ 1999年4月。
- 書評「ダニロ・キシユ『死者の百科事典』（山崎佳代子訳）」『日本経済新聞』1999年3月。
- 「燃え上がる忍耐（道成寺）」『華の実会』第5回プログラム 1999年1月。
- インタビュー「マリア・コダマーボルヘス 創作の瞬間」『すばる』集英社 1999年。
- 討論「20世紀文学を考える 第一部・第二部・第三部」『すばる』集英社 1999年。
- 「ラテンアメリカ文学の現況と翻訳・研究 '98」『文藝年鑑』日本文藝家協会 1999年。
- 「オルフェ」劇場用プログラム『オルフェ』ポッププロモーション 1999年。
- 「ドン・キホーテの変貌」『シアター・オリムピック手帖』別冊 静岡県舞台芸術センター 1999年3月。
- 「パイグを辿るスリリングな道のり」『青春と読者』集英社 1998年12月。
- 「世界の文学 ラテンアメリカ」『東京新聞』1998年11月。
- 「いまロルカがおもしろい」『アサヒグラフ』朝日新聞社 1998年10月。
- 「ゲバラ『ゲバラ日記』」『20世紀を震撼させた100冊』出窓社 1998年9月。
- 「ガルシア=マルケス『百年の孤独』」『20世紀を震撼させた100冊』出窓社 1998年9月。
- 「意識の複合体という聖杯を求めて—一宮内勝典『ぼくは始祖鳥になりたい』」『早稲田文学』1998年9月。
- 「プロムナード（連載1998.7~12.）」『日経新聞』1998年7月~12月。
- 書評「ルイス・セプルベダ『パタゴニア・エクスプレス』（安藤哲行訳）」『ラブ・ストーリーを読む老人』（旦敬介訳）」『翻訳の世界』バベル・プレス 1998年6月。
- 「ライブ・フレッシュ」『フィガロ・ジャポン』阪急コミュニケーションズ 1998年5月。
- 「対立を和解させた詩人 オクタビオ・パス氏を悼む」『朝日新聞』1998年4月。
- 「スペインの現実を超えて」『武蔵野美術』武蔵野美術大学 1998年4月。
- 「20世紀の古典 ボルヘス」『朝日新聞』1998年1月。
- 「〈文学ジャーナル〉雨のブエノスアイレス」『すばる』集英社 1998年1月。
- 書評「矢作俊彦『あ・じゃ・ぱん』」『読書新聞』1998年1月。
- 書評「ガルシア=マルケス『誘拐』（旦敬介訳）」『日本経済新聞』1998年1月。
- 「ラテンアメリカ文学の現況と翻訳・研究 '97」『文藝年鑑』日本文藝家協会 1998年。
- 書評「星野智幸『最後の吐息』」『文藝』河出書房新社 1998年。
- 「ライブ・フレッシュ」劇場用プログラム『ライブ・フレッシュ』フランス映画社/日本ビクター 1998年。
- 「フォークナーとラテンアメリカ文学」『ユリイカ』青土社 1997年12月。
- 「ドン・キホーテにしてサンチョ・パンサ チェ・ゲバラについて」『文藝』河出書房新社 1997年11月。
- 「チカーノ運動」『20世紀思想事典』三省堂 1997年10月。
- 「モデルニスモ」『20世紀思想事典』三省堂 1997年10月。
- 「魔術的リアリズム」『20世紀思想事典』三省堂 1997年10月。
- 「フォークナーという方法とラテンアメリカの作家たち」『フォークナー全集』月報 26 富山房 1997年10月。
- 「二人のウォン・カーウァイ」劇場用プログラム『ブエノスアイレス』プレノン・アッシュ 1997年9月。

- 「二つの悪夢：ボルヘス vs コックス」劇場用プログラム『死とコンパス』ケイブルボーグ 1997年9月.
- 「キューバの印象「イベリア イベロアメリカ映画祭」によせて」『聖教新聞』1997年9月.
- 「革命とカーニバル」『想い出のホテル』Bunkamura 1997年9月.
- 「ピアソラ!」『図書新聞』1997年8月2日号.
- 「メキシコ映画の魔術的魅力」『エスクァイア』1997年7月.
- 「他者と希望を求めて 村上龍」『毎日新聞』1997年6月.
- 「全てを浄化し、また「食べ」始めるとき」『翻訳の世界』バベル・プレス 1997年6月号.
- 書評「レイナルド・アレナス『夜になるまえに』(安藤哲行訳)」『岐阜新聞』他 1997年6月.
- 「笙野頼子論—マジックとリアリズムのはざままで」文藝春秋社『文学界』1997年6月.
- 「キューバという装置」青土社『ユリイカ 総特集村上龍』1997年6月152-157.
- 「新しい映画《ヌエボ・シネ》の試み」メキシコ映画祭実行委員会『Historia del cine mexicano』1997年6月36-39.
- 訳者後書き「サッカーと11の寓話」『サッカーと11の寓話』カミロ・ホセ・セラ著 1997年4月.
- 「キューバ文学は何を語るのか」『Studio Voice』インファス・パブリケーションズ 1997年4月.
- 『百年の孤独』『埋められた鏡』『ユリイカ20世紀を読む』青土社 1997年4月.
- 「ラテンアメリカの文化—文学・映画—」新評論『ラテンアメリカ研究への招待』1997年4月.
- 書評「E・ガレアーノ『収奪された大地』(大久保光夫訳)」『機』1997年3月.
- 『予告された殺人の記録』のパスpekティブ』『国文学』学燈社 1997年3月.
- 書評「トマス・エロイ・マルティネス『サンタ・エビータ』(旦敬介訳)」『日本経済新聞』1997年3月.
- 「プイグの声の秘密」『翻訳の世界』バベル・プレス 1997年2月.
- 「未訳書レビュー Carlos Fuentes, Geografía de la novela」『アイ・フィール』紀伊国屋書店 1997年2月.
- インタビュー「笑わないノーベル賞作家カミロ・ホセ・セラ」『トリッパー』朝日新聞社 春 1997年.
- 「ラテンアメリカ文学の現況と翻訳・研究 '96」『文藝年鑑』日本文藝家協会 1997年.
- 「批評の広場 ミュージカル『蜘蛛女のキス』」『朝日新聞』1996年11月.
- 「語りと再生『南国に日は落ちて』を訳して」『青春と読書』集英社 1996年11月.
- 訳者後書き「南国に日は落ちて」『南国に日は落ちて』マヌエル・プイグ著 集英社 1996年10月.
- 書評「ジョルジュ・アマード『果てなき大地』」『波』新潮社 1996年10月.
- 「ガルシア=マルケス『族長の秋』」『国文学』学燈社 1996年7月.
- 「マヌエル・プイグ『天使の恥部』」『国文学』学燈社 1996年7月.
- 「樹木の夢見る時—『争いの木の下で』を読む」『新潮』新潮社 1996年7月.
- 書評「ガルシア=マルケス『愛その他の悪霊について』(旦敬介訳)」『日本経済新聞』1996年6月.
- 書評「村上龍『ヒュウガ・ウィルス 五分後の世界』」『波』新潮社 1996年6月.
- 書評「カルロス・フエンテス『埋められた鏡』(古賀林幸訳)」『G・Q』コンデナスト・パブリケーションズ 1996年4月.
- 「クストリツァのバロキズム」劇場用プログラム『アンダーグラウンド』エース・ピクチャーズ 1996年4月.
- 「二人のエビータ」『文学界』文藝春秋社 1996年3月.
- 「KYOKO」『マリ・クレール』中央公論社 1996年3月.
- 「映像のなかの「エスペランサ」『KYOKO』」『毎日新聞』1996年3月.
- 「過激な都会性の秘密」劇場用プログラム『私の秘密の花』ヘラルド・エース 1996年3月.
- 「想像力と現実感覚」『すばる』集英社 1996年1月.
- 「マドリード古本探しの旅」朝日新聞社『トリッパー』冬 1996年.
- 「ガルシア=マルケス『百年の孤独』」『世界文学101物語』新書館 1996年.
- 書評「西成彦『イディッシュ』」『新潮』新潮社 1995年11月.
- 書評「宮内要治『旅の遠近』」『翻訳の世界』バベル・プレス 1995年7月.

- 「ラテンアメリカン・マインド」『毎日新聞』1995年6月。  
 書評「サルマン・ラシュディ『ジャガーの微笑』（飯島みどり訳）」『図書新聞』1995年6月。  
 「海外の文学（連載1995.5~2000.10）」『毎日新聞』1995年5月。  
 「探偵小説と全体性 バルガス=リョサ『アンデスのリトゥーマ』」『文學界』文藝春秋社 1995年5月。  
 「終焉と帰還 パス、フェンテス」『すばる』集英社 1995年4月。  
 「マルティンの夢、ソラナスの夢」劇場用プログラム『ラテンアメリカ 光と影の詩』シネマスクエアとうきゅう 1995年4月。  
 「カリブ海地域」『激動の文学』『信濃毎日新聞』1995年3月271-279。  
 ○「『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論—「僕」と「私」のデジャヴュ」『國文學』学燈社 1995年3月50-56。  
 「関係性の神話を解体—マヌエル・プイグの世界」『毎日新聞』1995年2月。  
 ○「地球サイズの男たち—ジーコ・セナ・猪木」『大航海』新書館 1995年2月。  
 「オネッティ」『年鑑ブリタニカ事典』TBSブリタニカ 1995年。  
 「ラテンアメリカ文学—謎解きの面白さ」『トヨタ』1995年。  
 書評「ステファノ・ベンニ『聖女チェレステ団の悪童』（中嶋浩郎訳）」『文學界』文藝春秋社 1995年。  
 書評「笠井潔『球体と亀裂』」『G・Q』コンデナスト・パブリケーションズ 1995年。  
 「チリ映画の流れ」劇場用プログラム『独りぼっちのジョニー』オンリーハーツ・アスク=講談社 1995年。  
 インタビュー「女性を仲介者に南米と文化交流」『毎日新聞』1994年12月。  
 座談「能を楽しむ」『華の実会第一回』1994年11月。  
 「ラテンアメリカ文学への関心—研究所30周年によせて」『聖教新聞』1994年11月。  
 「歪んだキューバ」『読売新聞』1994年11月。  
 「ラシュディ」『現代思想ピープル101』新書館 1994年10月。  
 「ガルシア=マルケス」『現代思想ピープル101』新書館 1994年10月。  
 ○「苺とチョコレート」『マリ・クレール』中央公論社 1994年10月。  
 書評「ホセ・マリア・アルゲダス『深い川』（杉山晃訳）」『図書新聞』1994年7月。  
 ○「私の好きな映画ベスト5」『リテレーブルブックス4』メタログ 1994年6月。  
 ○「私の好きなクラシックレコードベスト3」『リテレーブルブックス3』メタログ 1994年6月。  
 「壮大なシンフォニー—「ドン・キホーテ」の宇宙」『ダンスマガジン』新書館 1994年5月。  
 書評「村上春樹『やがて悲しき外国語』」『翻訳の世界』バベル・プレス 1994年5月。  
 ○書評「セルバンテス『模範小説集』（牛島信明訳）」『マリ・クレール』中央公論社 1994年5月。  
 書評「奥田道大『池袋のアジア系外国人』」『翻訳の世界』バベル・プレス 1994年4月。  
 ○「音の森の真中に、ぼくを立たせる盤はない」『リテレーブル 別冊6』メタログ 1994年3月。  
 「FOREIGN BOOKS（連載1994.3~1997.3）」『読売新聞』1994年3月~1997年3月。  
 「スペクタクルと描写—村上龍『五分後の世界』」『早稲田文学』1994年2月85-89。  
 “Momento dinámico de la cultura mexicana” en *Actas de la Asociación Internacional de Hispanista 1992*. 1994年2月。  
 「パラレル・ワールドの旅—松浦理英子『親指Pの修行時代』」『新潮』新潮社 1994年2月。  
 「ベネデッティの成熟」『文學界』文藝春秋社 1994年。  
 ● 解説「死の原理が勝利を収めるハッピーエンド」戯曲『蜘蛛女のキス』劇書房 1994年。  
 ○「江戸っ子とイギリス文学のユーモア『坊ちゃん』」『リテレーブル』メタログ 1994年。  
 ● 「「新大陸発見五百周年」を意識した離れ業」『中央公論 文芸特集 '93』中央公論社 秋季号。  
 「中上健次と世界文学」『国文学解釈と鑑賞』別冊 至文堂 1993年9月。  
 ● 「タコ・メサの奇跡」『新潮』新潮社 1993年9月。  
 「魚は水を得たか」『群像』講談社 1993年9月。  
 ● 「ニュー・ラティノー・フィクション」『中央公論 文芸特集 '93』中央公論社 1993年夏季号。  
 対談「独裁者マシアス・ギリの選択」野谷文昭・池澤夏樹『新潮』新潮社 1993年8月。

- 書評「フリオ・コルタサル『すべての火は火』(木村榮一訳)『産経新聞』1993年8月.
- 「J・ドノソ 亡命と言葉」『すばる』集英社 1993年7月.
  - 「日常・非日常を越境する密室劇」『産経新聞』1993年6月.
  - 「ツバメが戻るとき」『すばる』集英社 1993年4月号.
  - 「活気と混沌」『すばる』集英社 1993年3月号.
  - 「風景の魔術的变化」『すばる』集英社 1993年2月号.
  - 「カナダからの手紙」『すばる』集英社 1993年1月号.
  - 「クーバ・ベン・イ・ベラス」『すばる』集英社 1993年1月号.
- 「ラテンアメリカ文学の現況と翻訳・研究 '92」『文藝年鑑』日本文藝家協会 1993年.  
「ドン・キホーテの変貌」静岡県舞台芸術センター『シアター・オリンピック手帖』1993年.
- 「少女の幻『ジェニーの肖像』」『翻訳の世界』バベル・プレス 1993年.  
「ペーパーナイフ (連載 1992.5~1995.1)」『毎日新聞』1992年5月~1995年1月.
- 「様々な出会い」『すばる』集英社 1992年12月号.
  - 「メタファー解説へ」『海燕』福武書店 1992年12月号.
  - 「「アジア系」について」『すばる』集英社 1992年11月号.
  - 「メヒコの時間」『すばる』集英社 1992年10月.
  - 「カリフォルニアのメキシコ」『すばる』集英社 1992年9月.
  - 「メキシコからの同時代の視線」『翻訳の世界』バベル・プレス 1992年9月号.
  - 「治安と暴動」『すばる』集英社 1992年8月.
  - 「エネルギーなチリ出身の女性作家」『中央公論 文芸特集 '92』中央公論社 1992年夏季号.
  - 「SFと幻想の同化」『翻訳の世界』バベル・プレス 1992年5月号.
  - 「空気が動く喫茶店」『マリ・クレール』中央公論社 1992年5月号.
  - 「メントン氏とメキシコ日和」『海燕』福武書店 1992年2月.
- 書評「寺山修司『臓器交換序説』」『読売新聞』1992年2月.  
座談「一九九一年文学回顧」『文學界』文藝春秋社 1992年1月.  
「概観 文学」『文芸年鑑』日本文芸家協会 1992年.
- 「ドラマの生起する場所」『中央公論 文芸特集 '92』中央公論社 1992年春季号.
- 「ラテンアメリカ文学の現況と翻訳・研究 '91」『文芸年鑑』日本文芸家協会 1992年.
- 『時間探しの旅』『文藝 冬 特集 中上健次』河出書房新社 1992年.  
「未訳書クリティーク Patty Diphusa y otros textos, Pedro Almodóvar」『翻訳の世界』バベル・プレス 1991年12月.  
「メタファー解説へ」『海燕』福武書店 1991年12月.  
「路地と悪党—中上健次とラテンアメリカ文学」『國文學』学燈社 1991年12月.
- 書評「荻野アンナ『背負い水』」『月刊 Asahi』朝日新聞社 1991年12月.
- 「挫折した革命のジレンマを核に持つ冒険小説 カルロス・フエンテスの長編小説『戦い』」『中央公論 文芸特集 '91』中央公論社 1991年冬季号.
  - 「国際的ポルノ女優のモノローグ」『翻訳の世界』バベル・プレス 1991年12月号.
- 座談「篠田一士の遺したもの」『Poetica』小沢書店 1991年11月.  
「真夜中のカウボーイ」『太陽』平凡社 1991年11月.
- 書評「青野聡『母よ』」『Cardie』福武書店 1991年10月.  
書評「マヌエル・プイグ『ネイキッド・タンゴ』(中田耕治訳)」『産経新聞』1991年9月.  
書評「ガルシア=マルケス『ジャーナリズム作品集』(鼓直訳)」『マリ・クレール』中央公論社 1991年8月.
- 「レイナルド・アレナスの死と栄光」『中央公論 文芸特集 '91』1991年夏季号.
  - 「虚構の上に構築された知的ゲームを楽しむ」『翻訳の世界』バベル・プレス 1991年7月号.
- インタビュー「ロバート・アラン・アッカーマン」『すばる』集英社 1991年6月.  
座談「'80-'90 時代を読む」『月刊 Asahi』朝日新聞社 1991年6月.  
討論「20世紀文学—多国籍性の魅力」『新潮』新潮社 1991年5月.  
「母親と息子—ボウルズにとってのラテンアメリカ体験」『現代詩手帖』思潮社 1991年4月.



- 「辞書はこう使う」『翻訳の世界』バベル・プレス 1991年4月号.
- 「不条理な現実が生み出した熱気 ラテンアメリカ諸国」『20世紀の世界文学 '91』臨時増刊号 新潮社 1991年4月
- 「未訳書クリティーク 状況を重ね合わせて Sor Juana Inés de la Cruz o Las trampas de la fe, Octavio Paz」『翻訳の世界』バベル・プレス 1991年4月.
- 「ブニュエルの個人主義」劇場用プログラム「ピバ、ブニュエル！メキシコ回顧録」ヘラルド・エース 1991年3月.
- 「トリニダード島を舞台に描く全体小説」『翻訳の世界』バベル・プレス 1991年3月号.
- 書評「大江健三郎『静かな生活』」『月刊 Asahi』朝日新聞社 1991年2月.
- 「文豪の興味ある初期傑作集」『週間ポスト』1991年2月.
- 「モモンガアと祖父母の家」『日経新聞』1991年2月.
- 書評「性を通して「女」の自己同一性を追求 ルイサ・バレンスエラ『武器の交換』（斉藤文子訳）」『月刊 Asahi』朝日新聞社 1991年1月.
- 書評「バルガス=リョサ『継母礼賛』（西村英一郎訳）」『マフィン』小学館 1991年1月.
- 「ラテンアメリカ諸国「20世紀の世界文学」」新潮社『新潮』臨時増刊号 1991年1月.
- 座談「幻想文学の可能性」新日本文学会『新日本文学』夏 1991年.
- 「ラテンアメリカ文学再考」『季刊アステイオン』冬 TBSブリタニカ 1991年.
- 「ラテンアメリカの「児童文学」事情」『児童文学世界』中教出版 1991年.
- 「歴史と神話のあいだで—ガルシア=マルケスの驚異の世界」『オーラ！アミーゴス』夏 1991年.
- 「透明なこだま」『中央公論 文芸特集 '91』中央公論社 1991年夏号.
- 「萩尾望都「半身」」『Et Puis 23』白地社 1991年.
- 「ガデスの手」『アントニオ・ガデス 1991年公演』（ジャパン・アーツ）1991年.
- 「ブライス=エチェニケの新作中編集—時の経過と遠近法」『中央公論』秋 中央公論社 1991年.
- 書評「マヌエル・プイグ『このページを読む者に永遠の呪いあれ』（木村榮一訳）」『産経新聞』1990年12月.
- 「ビブリオテカとの出会い」『IS』ポラ文化研究所 1990年12月.
- 「ガルシア=マルケス ラテンアメリカを体現する」『AERA』朝日新聞社 1990年12月.
- 「(特集 恋文物語) パブロ・ネルーダ」『マリ・クレール』中央公論社 1990年12月.
- 「ニューヨークを舞台に描く重い現実」『産経新聞』1990年12月.
- 書評「バルガス=リョサ『継母礼賛』（西村英一郎訳）」『月刊 Asahi』朝日新聞社 1990年11月.
- 「現代ブラジルナイーブ派絵画展」『アサヒグラフ』朝日新聞社 1990年11月.
- 「ローマの誓い—ガルシア=マルケスとビリ」劇場用プログラム『大きな翼を持った老人』ヘラルド・エース 1990年11月.
- 「カリブ特有の“熱を孕む作品群”」『マリ・クレール』中央公論社 1990年11月.
- 「ボリビア映画『地下の民』インディオの内面を描く視点」『朝日ジャーナル』朝日新聞社 1990年11月.
- 「性愛描写のウルトラ・リアリズム バルガス=リョサ『継母礼賛』」『月刊 Asahi』朝日新聞社 1990年11月.
- 「インタビューによる作家たちの新しい素顔」『翻訳の世界』バベル・プレス 1990年11月号.
- 「ブラジル・ナイーブ派と「赤」とスケール」『現代ブラジル・ナイーブ派絵画展 2』資生堂 1990年10月.
- 書評「カズオ・イシグロ『日の名残り』」『月刊 Asahi』朝日新聞社 1990年10月.
- 「ノーベル文学賞のパス氏 歴史・政治・思考する詩人」『共同通信』1990年10月.
- 「ラテンアメリカ文学の'90」『読売新聞』1990年10月.
- 「新ラテンアメリカ映画祭'90」『朝日ジャーナル』朝日新聞社 1990年10月.
- 「死によって強まるエロス『フォルベス夫人の夏』」劇場用プログラム「新ラテンアメリカ映画祭'90」シネセゾン 1990年10月.
- 「急逝したプイグの新しさ」『中央公論』秋 中央公論社 1990年.
- 「追悼 マヌエル・プイグ プイグの死を実感するために」『すばる』集英社 1990年9月.

- 「越境するプイグの声」『翻訳の世界』バベル・プレス 1990年9月号。
- 書評「里見実『ラテンアメリカの新しい伝統』」『朝日ジャーナル』朝日新聞社 1990年8月。
- 「マヌエル・プイグのアルゼンチン的な客死」『朝日ジャーナル』朝日新聞社 1990年8月。
- 「マヌエル・プイグ 小市民の目で政治を描く」『共同通信』1990年8月。
- 「世界の現代作家を祖上にのせるエッセー集」『中央公論 文芸特集 '90』中央公論社 1990年夏季号。
- 書評「中沢新一『バルセロナ、秘数3』」『日本経済新聞』1990年7月。
- 座談「語るべきものとの時間 マヌエル・プイグ+村上龍+野谷文昭」『すばる』集英社 1990年7月。
- 「往復書簡 村上龍さんへ 現実というシステムへの憎悪」『群像』講談社 1990年7月。
- 「メヒコの穴を抜けて一大江健二郎の(現在)」『國文學』学燈社 1990年7月。
- 「国の混乱が作家を刺激する・ラテンアメリカ文学のパワー！」『月刊Asahi』朝日新聞社 1990年7月。
- 「アルゼンチンの作家プイグをしのぶ」『産経新聞』1990年7月。
- 「メキシコ時代に光を当てる」『イメージ・フォーラム』1990年7月号。
- 「笑わせてくれるルポルタージュ」『翻訳の世界』バベル・プレス 1990年6月号。
- 「ペルーの「深い河」」『毎日新聞』1990年6月。
- 「ラテンアメリカ 老いと取り組む巨匠たち」『東京新聞』1990年6月。
- 「世界の文学は今・ラテンアメリカ」『共同通信』1990年6月。
- 「キューバ革命から三十年」『東京新聞』1990年6月。
- 「スペイン・ニューウェイヴの痛快なスタイル」『STUDIO VOICE』インファス・パブリケーション 1990年6月号。
- 「ペルー大統領にいだむ 文学者マリオ・バルガス=リヨサは黙示録的世界と訣別したのか？」『朝日ジャーナル』朝日新聞社 1990年6月。
- 「親密な空間」劇場用プログラム『100人の子供たちが列車を待っている』パンドラ 1990年6月。
- 「スペインの死生観と思考様式」『産経新聞』1990年5月。
- インタビュー「マヌエル・プイグ「越境する声」」『翻訳の世界』日本翻訳家養成センター 1990年5月。
- 書評「ノーベル賞作家の処女作にみなぎる文学的野心 カミロ・ホセ・セラ『パスクアル・ドゥアルテの家族』(有本紀明訳)」『Studio Voice』インファス・パブリケーションズ 1990年4月。
- 「鋭いまなざしを持つ南の詩人」『マリ・クレール』中央公論社 1990年4月号。
- 「デジャ・ヴュする暴力」『図書』岩波書店 1990年4月号。
- 「メキシコ革命を見つめるクールな視線」『読書人』1990年4月。
- 「来日したアルゼンチンの作家マヌエル・プイグと会って」『朝日新聞』1990年4月。
- 「オクタビオ・パス(いま、なお現役)」『マリ・クレール』中央公論社 1990年4月。
- 「バルガス=リヨサ：混沌より秩序を？」『ユリイカ』青土社 1990年4月。
- 書評「ガルシア=マルケス『青い犬の目』(井上義一訳)」『週間ポスト』小学館 1990年2月。
- 「未訳書クリティーク 異分子たるものへの視線 Mario Vargas Llosa, *El hablador*」『翻訳の世界』バベル・プレス 1990年2月。
- 「愛だって、習うものだよ」『エスクァイア』別冊『TIERRA』ユー・ピー・シー 1990年1月号。
- 「ラテンアメリカの恋」『エスクァイア』ユー・ピー・シー 1990年1月。
- 「オクタビオ・パスのノーベル文学賞受賞」『中央公論』冬 中央公論社 1990年。
- 「パンパは燃えさかるのか？」劇場用プログラム『フエゴス』シネセゾン 1990年。
- 「書斎の騎士—ノーベル賞作家カミロ・ホセ・セラ」『新潮』新潮社 1989年12月。
- 「闇と恐怖の織りなす迷宮 ホセ・ドノソ『夜のみだらな鳥』」『國文學臨時増刊号 幻想文学の劇場』学燈社 1989年12月。
- 「フェミニズムを問う良質のエンターテイメント」『日本経済新聞』1989年11月。
- 「ラテンアメリカ文学の現在：革命二百年のパリで一パスとマルケス」『ユリイカ』青土社 1989年

11月.

「ノーベル賞 セラ 人と作品と」『朝日新聞』 1989年10月.

「神経衰弱ぎりぎり会談!？」劇場用プログラム『神経衰弱ぎりぎりの女たち』ユーロスペース  
1989年10月.

- 書評「異端の修道士のピカレスク・ロマン レイナルド・アレナス『めくるめく世界』(鼓直・杉山晃訳)『マリ・クレール』中央公論社 1989年9月.
  - 「若き日の閉塞状況 オクタビオ・パス『初期散文集』『ユリイカ』青土社 1989年9月.
  - 「ブニュエルは「偽の秩序」が嫌いだ!」『別冊宝島 映画の見方が変わる本』1989年9月号.
  - 「フランコなんて知らないよ」『別冊宝島 映画の見方が変わる本』1989年9月号.
  - 「未来は女たちのためにある」『マリ・クレール』中央公論社 1989年9月号.
- 書評「ラテンアメリカが生んだ素敵な女性 芳田悠二『ガブリエラ・ミストラル』『朝日ジャーナル』朝日新聞社 1989年8月.
- 「失われた辞典」『図書』岩波書店 1989年8月.
- 「隠れ家=書斎=ハーフムーン」『月刊アドバタイジング』電通 1989年8月号.
  - 「少年の魔術的世界 未訳書クリティーク Reinaldo Arenas, "Cantando en el pozo"」『翻訳の世界』バベル・プレス 1989年7月.
  - 「スペイン映画は再び蘇るか?」『マリ・クレール』中央公論社 1989年7月.
  - 「歴史を見ること」『文学界』文藝春秋社 1989年7月号.
  - 書評「村上春樹『消えた海岸のゆくえ』」『ユリイカ』青土社 1989年6月.
  - 「「南」の過剰さに字幕は対応できない」『翻訳の世界』バベル・プレス 1989年6月号.
  - 書評「三角形の軽さとマチスモ アーネスト・ヘミングウェイ『エデンの園』」『早稲田文学』1989年5月.
  - 「カルロス・サウラの描く“集団的狂気”」『Bisser』CBS ソニー出版 1989年4月.
- 「ラテンアメリカのキーワード(連載)」『NHK テレビ スペイン語講座』日本放送出版協会 1989.4~1991.
- 「ボルヘス、驚嘆するヨーロッパ」『ユリイカ』青土社 1989年3月
- 「神経衰弱ぎりぎりの女たち」『マリ・クレール』中央公論社 1989年3月.
- 「引き算のスタイリスティックス」『翻訳の世界』バベル・プレス 1989年3月号.
  - 「循環する時間、たわむ時間、逆流する時間: 運動する過去と現実を語り直すラテンアメリカ文学」『gap Deux』ギャップ・ジャパン 1989年3月.
  - 「タンゴの町から楽園を求めて」『W-IN-D 1989 夏』商店建築社 1989年.
- 「漂流する記憶」劇場用プログラム「キューバ映画祭'89」シネセゾン 1989年.
- 「カリブの孤独な独裁者たち ノルベルト・フエンテス『ヘミングウェイ キューバの日々』『すばる』集英社 1988年12月号.
- 「ブニュエル・ダリ・ロルカと結ぶ三角形」『翻訳の世界』バベル・プレス 1988年11月.
- 「マルケスとヌエボ・ペリオディスモ」『ユリイカ』青土社 1988年11月.
- 「ガルシア=マルケスの視線 コロンビア映画『死の時』」『東京新聞』 1988年11月.
- 「ブイグ、報われた不在の風景」『すばる』集英社 1988年11月号.
  - 「ボゴタの奇蹟」劇場用プログラム「ラテンアメリカ映画祭1988」ラテンアメリカ映画祭実行委員会 1988年10月.
  - 「「南」の暴力から生まれた儀式としての殺人劇『予告された殺人の記録』中央公論社『マリ・クレール』 1988年9月.
  - 「リード、オーウェル、チェ・ゲバラが記した革命」『ちくま』筑摩書房 1988年9月号.
- 対談「南の熱い文学 中上健次・野谷文昭」『ユリイカ』青土社 1988年8月.
- 「ガルシア=マルケス特集:「現実」との結び目」『ユリイカ』青土社 1988年8月.
  - 書評「スピード、実験、感傷性がたまらない」『すばる』集英社 1988年4月.
  - 「アルトー「モクテスマの再生」」『ユリイカ』青土社 1988年2月.
- 「ラテン・アメリカの現代詩—政治と小説の狭間で—」『ユリイカ臨時増刊』青土社 1987年12月.
- 「ラテンアメリカ文学の二重性」『出版ニュース』1987年10月.

- 「ブニュエルのあいまいな肖像」『イメージ・フォーラム』ダゲレオ出版 1987年9月。  
「ルイス・ブニュエルの物語」『イメージ・フォーラム』ダゲレオ出版 1987年9月。
- 書評「宮本輝『五千回の生死』」『文學界』文藝春秋社 1987年8月。
- 「メキシコ時代のブニュエル」『マリ・クレール』中央公論社 1987年8月。
- 書評「中上健次『火まつり』」『新潮』新潮社 1987年7月。
- 「『暗殺のオペラ』バルトリッチの世界」『マリ・クレール』中央公論社 1987年7月。
- 「メキシコ時代のブニュエル もうひとつの黄金時代」劇場用プログラム ヘラルド・エース 1987年7月。
- 「熱帯としての南米の発見」ポーラ文化研究所『IS』 1987年6月。  
「今月の一冊（連載）」日本放送出版協会『NHK テレビスペイン語講座』1987.5~1989.2.
- 書評「インディアン之眼による視点 宮内勝典『ニカラグア密航計画』」『読書人』1987年4月。
- 「スペイン語はこんなことば」『翻訳の世界』バベル・プレス 1987年4月。  
「中心の喪失と移動について 映画『タンゴガルドの亡命』を観て」『毎日新聞』1987年3月。
- 「ブルジョアジーの秘かな不安」劇場用プログラム「アルゼンチン映画祭」アテネフランセ文化センター 1987年3月。  
「オフィシャル・ストーリー」『公明新聞』1987年3月。
- 「魔術的手腕の傑作ノンフィクション」『新潮45』新潮社 1987年2月。  
「ラテンアメリカの内的亡命者たち」『本』講談社 1987年2月。
- 「〈文学散歩〉カリブ海の冒険」『立教No.122』1987年。
- 「土着する夢 20世紀文学の極点・ボルヘスを偲んで」『季刊アステイオン』冬号 TBSブリタニカ 1987年。
- 「宿命とパラドックス」（公演プログラム）Ballet Antonio Gades con Cristina Hoyos 1987公演」（ジヤパン・アーツ） 1987年。  
「〈小説〉とユーモア」アジア経済研究所『ラテンアメリカレポート』 1987年。  
「運動する詩—ラテンアメリカ—」『新潮』新潮社 1986年12月。
- 「ボルヘスの孫たちがここにいる」『翻訳の世界』バベル・プレス 1986年12月。  
「ラテンアメリカ・アルゼンチンのSF小説」『翻訳の世界』バベル・プレス 1986年12月。
- 「ラテンアメリカの現代詩」『ユリイカ・現代詩の実験』青土社 1986年12月。
- 「インディヘニスモの抵抗 マヌエル・スコルサ」バベル・プレス『翻訳の世界』 1986年11月。
- 「マージナルなものへの共感者たち アントニオ・スカルメタ／アリエル・ドルフマン」『翻訳の世界』バベル・プレス 1986年10月。  
「ラテンアメリカの小説と映画『蜘蛛女のキス』の映画化から」『毎日新聞』 1986年9月。
- 「詩人の国、チリに注目せよ イサベル・アジェンデ」『翻訳の世界』バベル・プレス 1986年9月。
- 「文学とサッカーを同列において論ぜよ」『翻訳の世界』バベル・プレス 1986年8月。  
「ラテンアメリカ・メキシコ グスタボ・サインス」『翻訳の世界』バベル・プレス 1986年8月。  
「混沌とした夢と現実、南米文学のエッセンス ヘクトール・バベンコ『蜘蛛女のキス』」『Wジャパン』1986年7月。  
「ラテンアメリカ主義の二律背反」『新潮』新潮社 1986年7月 176-180。  
「ボルヘスは完全に死ねたか」『東京新聞』1986年6月。  
「ガルシア=マルケスにおける老いと愛」『毎日新聞』1986年6月。
- 「途方もない世代の年代記 北杜夫『輝ける碧き空の下で』」『新潮』新潮社 1986年4月号。  
「ラテンアメリカ文学案内」『Studio Voice』インファス・パブリケーションズ 1986年4月。
- 「ボルヘスのイメージ」『群像』講談社 1986年3月。
- 「モノクロの島アナタハン」『群像』講談社 1986年3月。
- 「地震、噴火、暴力への抵抗」『新潮』新潮社 1986年2月号。
- 「〈世界の街から〉マラセナの道、五往復」『東京人』都市出版 1986年1月。  
「『蜘蛛女のキス』モリーナの声が紡ぐ夢」劇場用プログラム 1986年。
- 「フォルスタッフとドン・キホーテ」劇場用パンフレット『フォルスタッフ』Cine Vivant 1986年。

- 「風景消失、死者の道の発見」『中央公論』中央公論社 1985年12月号.
- 「潜在的欲望としてのフェイク」『映画の手帖 シネアスト2 オーソン・ウェルズ特集号』青土社 1985年9月号.
- 「バルガス=リョサの挑戦」『新潮』新潮社 1985年7月.
- 『『百年の孤独』の食卓空間』『IS』ポーラ文化研究所 1985年6月.
- 「サバト・闇の報告書」『毎日新聞』1985年5月.
- 「インタビュー ビクトル・エリセ I」『イメージ・フォーラム』ダゲレオ出版 1985年5月.
- 「インタビュー ビクトル・エリセ II」『イメージ・フォーラム』ダゲレオ出版 1985年4月.
- 書評「篠田他編『ラテンアメリカの文学』」『ラテンアメリカ研究年報』(5)1985年.
- 「中上健次と村上春樹—都市と反都市」『國文學』学燈社 1985年77-78.
- 「中上健次 小説の前衛として」『國文學』学燈社 1985年2月号.
- 「新しい時代を告げる交響曲」『日本読書新聞』1984年9月.
- 「オクタビオ・パスの憂愁—文化の複数性は可能か—」『新潮』新潮社 1984年9月.
- 「越境とモダニズム「同時代人」の時代」『現代詩手帖』思潮社 1984年9月.
- 「モダンジャズとラテンアメリカ文学」『毎日新聞』1984年6月.
- 書評「日野啓三『名づけられぬものの岸辺にて』」『海』中央公論社 1984年5月.
- 「“実験と逸脱”の作家—コルタサルスの死」『新潮』新潮社 1984年5月.
- 「葛藤する新しい世代の言葉—マヌエル・プイグの作品から」『毎日新聞』1984年4月.
- 「フリオ・コルタサルスの死」『海』中央公論社 1984年4月.
- 「ペルーの作家マヌエル・スコルサ」『海』中央公論社 1984年3月.
- 「知的革命としてのモデルニスモ—プエノスアイレス」『現代詩手帖』思潮社 1984年3月.
- “Análisis de la historia de los últimos 200 años : desde el enfoque literario”, 南山大学ラテンアメリカ研究センター *Simposio sobre América Latina* 1984年3月.
- 書評「村上春樹『カンガルー日和』」『海』中央公論社 1984年1月.
- 「南へ向かう再生の旅」『エル・スール』CBS ソニーグループ (ビデオ解説) 1983年
- 「バルガス=リョサ『キャシーと河馬』」『海』中央公論社 1983年12月.
- 「女性化した男達の会話」バベル・プレス『翻訳の世界』1983年10月.
- 『『アルゼンチン文学史』第五巻「現代」』『海』中央公論社 1983年10月.
- 「オクタビオ・パス『尼僧フアナあるいは信仰の罫』」『海』中央公論社 1983年6月.
- 「プイグの新作『報われた血の愛』」『海』中央公論社 1983年6月.
- 「海外文学情報ラテンアメリカ」『早稲田文学』1983年2月.
- 書評『ある遭難者の物語』『海』中央公論社 1983年3月
- 書評『ジャーナリズム作品集 1,2』『海』中央公論社 1983年2月
- 「崩壊する共同体への挽歌」『新潮』新潮社 1983年2月.
- 「ガルシア=マルケス〈暴力の文学〉」上智大学イベロアメリカ研究所『イベロアメリカ研究』1983年1月.
- 書評「カルロス・フエンテス『アウラ』」『セルバンテスまたは読みの批判』『朝日ジャーナル』朝日新聞社 1982年11月.
- 書評「カルロス・フエンテス『アウラ』」『セルバンテスまたは読みの批判』『海』中央公論社 1982年11月.
- 「ラテンアメリカの代表的詩人ニカノール・パラの近況」『海』中央公論社 1982年11月.
- 「ガルシア=マルケス ノーベル賞受賞 伝説的過去の復権」『読売新聞』1982年10月22日.
- 「鏡像としてのブニュエル」『ユリイカ』青土社 1982年6月.
- 「アンダルシアの犬」『ユリイカ』青土社 1981年10月.
- 「ル・クレジオとインディヘニスモ」『現代詩手帖』思潮社 1981年3月.
- 「ガルシア=マルケスとジャーナリズム」『現代詩手帖』思潮社 1981年2月.
- 「隣接／仲介 パスの最新評論集」『現代詩手帖』思潮社 1981年1月.
- 「パスのエロティシズム」『シュルレアリスムの詩』青土社 1981年.

## 5. 学会発表・講演

- 「響き合う言葉—外国文学者・翻訳者が語るラテンアメリカ文学」 野谷文昭（司会）・工藤庸子・鴻巣友季子・花方寿行・管啓次郎 日本比較文学会第50回東京大会（於）日本大学文理学部 2012年10月.
- 「カルロス・フエンテスを称えて」 鼓直・野谷文昭・清水憲男・寺尾隆吉（於）セルバンテス文化センター 2012年7月.
- 「深南部の南から—パラダイムとしてのフォークナー」 日本英文学会シンポジウム（「偉大な」小説とは何か 没後50年のフォークナー）2012年5月.
- 講演「詩人ボルヘス」（社）日本詩人クラブ3月例会（於）東京大学駒場キャンパス 2012年3月.
- 朗読会「ボルヘスを読む—『七つの夜』から「盲目について」」（於）西荻窪 数寄和 2012年3月.
- 講演「アルゼンチンを代表する作家・詩人—ホルヘ・ルイス・ボルヘス」国際言語文化アカデミア開所1周年記念 アルゼンチンデー（於）国際言語文化アカデミア、地球市民かながわプラザ 2012年2月.
- 朗読「オクタビオ・パス 詩人の宴」（於）ギャラリー東京ユマニテ 2011年12月.
- 国際シンポジウム「世界文学とは何か？」徹底討議 デイヴィッド・ダムロッシュ、池澤夏樹、柴田元幸、沼野充義、野谷文昭 東京大学文学部現代文芸論研究室主催（於）東京大学文学部法文2号館 2011年11月.
- 朗読「パブロ・ネルーダ 詩人の宴」（於）ギャラリー東京ユマニテ 2011年10月.
- 対談「映画『低開発の記憶』上映+トークショー」野谷文昭、比嘉世津子 2011年8月.
- トーク「『グッド・ハープ』とメキシコ文化」野谷文昭、東ちづる 「メキシコ映画『グッド・ハープ』に観る文化とハープと女性たち」（於）シネマート新宿 2011年7月.
- 講演「日本におけるマリオ・バルガス＝リョサ」マリオ・バルガス＝リョサ講演『都会と犬ども』から『ケルト人の夢』まで（於）セルバンテス文化センター 2011年6月.
- 司会「マリオ・バルガス＝リョサ講演会」（於）京都外国語大学 2011年6月.
- 司会「文学への情熱ともうひとつの現実の想像」（於）東京大学本郷キャンパス 2011年6月.
- 講座「メキシコを楽しむアラカルト」（於）豊洲センター 2010年11月.
- ブックプレゼンテーション "HANABI" クリスティーナ・ラスコン・カストロ（於）メキシコ大使館 2010年10月.
- 翻訳出版記念講演会「ロベルト・ボラーニョ『野生の探偵たち』」野谷文昭・柳原孝敦・松本健二（於）セルバンテス文化センター 2010年4月.
- Preview and Talk 『ルド and クルシ』（於）スパイラルホール 2010年2月7日.
- ワークショップ コメンテーター「第8回 メキシコにおける女性の表象：1940年代～60年代の文学・映画を中心に」上智大学グローバル・スタディーズ研究科 大学院生・次世代研究者ワークショップ（於）上智大学 2010年1月.
- シンポジウム「ボルヘスと南北アメリカ 柴田元幸+野谷文昭」ボルヘス会創立10周年記念シンポジウム：講演会（於）セルバンテス文化センター 2009年10月.
- 司会「セネル・パス講演会」（於）セルバンテス文化センター 2009年10月.
- トーク「『莓とチョコレート』にみるキューバ」キューバ映画祭 2009（於）ユーロスペース 2009年9月.
- 講座「同時代の世界をみつめて—キューバと文学・映画」神奈川大学エクステンション講座（於）KU ポートスクエア 2009年7月.
- 講座「第七回 ブニユエルにとってのメキシコ、メキシコにとってのブニユエル」異文化理解講座「メキシコの美の巨星たち」国際交流基金 2008年11月.
- シンポジウム「文豪とことわざ—セルバンテス・シェイクスピア・ドストエフスキー・漱石」北村孝一+中野春夫+野谷文昭+井桁貞義（於）明治大学 2008年11月.
- シンポジウム「『翻訳の挑戦』坂手洋二+野谷文昭+且敬介+マルガレット・デ・オリベイラ」第一回

ガルシア=マルケス会議（於）セルバンテス文化センター 2008年10月。  
 講座「第一回 メキシコ文化という謎を解く愉しみ」【講座】異文化理解講座「メキシコの美の巨星たち」国際交流基金 2008年9月。  
 パネルディスカッション「フリオ・コルタサルの終わりなき旅」（於）セルバンテス文化センター 2008年7月。  
 シンポジウム「今《世界文学》は可能か？グローバリゼーションの中で 21世紀比較文学の現在を問う」日本比較文学会第70回全国大会（於）大妻女子大学 2008年6月。  
 シンポジウム「世界の文学とラテンアメリカ」東京大学文学部現代文芸論研究室 桜庭一樹+野谷文昭+柴田元幸+沼野充義 2008年6月。  
 対談「『溺れる男』演出家ダニエル・ベロネッセ×野谷文昭」早稲田大学演劇博物館グローバルCOEと東京国際芸術祭共同企画 2008年3月。  
 講演「フリオ・コルタサル『愛しのグレンダ』出版記念発表会」（於）アルゼンチン共和国大使館 2008年3月。  
 講座「第十回プイグの小説の登場人物はなぜ映画のストーリーを語るのか？」異文化理解講座「ラテンアメリカ文学は何を語ってきたか？」（国際交流基金） 2007年3月。  
 講座「第一回ラテンアメリカ文学とは何か—開講にあたって」異文化理解講座「ラテンアメリカ文学は何を語ってきたか？」（国際交流基金） 2007年1月。  
 シンポジウム「翻訳する、とは何か？」表象文化とグローバリゼーション（於）東京外国語大学 2007年1月。  
 講演「イサム・ノグチ、岡本太郎とメキシコ」立教大学ラテンアメリカ研究所 2006年12月。  
 講演「文学のグローバル化、グローバル化の文学」中南米理解講座（国際交流基金） 2006年11月。  
 講座「映画に見るメキシコ系アメリカ人の眼差し」アートで読み解くアメリカ社会—メキシコ系アメリカ人編—（早稲田大学エクステンションセンター） 2006年11月。  
 講演「メキシコ文学について」メキシコ—日本アミーゴ会講演会 13回（於）上智大学・ソフィアンズクラブ 2006年9月。  
 国際シンポジウム「《世界化》の時代における文学の存在理由 文学の中の世界像」東京外国語大学総合文化研究所主催（於）日仏会館ホール 2005年8月。  
 「ラテンアメリカを《越境》する—文学が創るものと壊すもの」日本ラテンアメリカ学会第26回大会（於）早稲田大学 2005年6月。  
 公開シンポジウム「国境を食い破れ！」立教大学ラテンアメリカ研究所 2005年1月。  
 シンポジウム「迷宮の—グローバリゼーションと想像力」表象文化とグローバリゼーション（於）東京外国語大学 2005年1月。  
 トーク「ボルヘス、ネルーダ、パス アウレリオ・アシアイン×野谷文昭」（於）ジュンク堂書店池袋店 2005年1月。  
 「現代のラテンアメリカ」立教大学ラテンアメリカ研究所創設40周年記念行事 2004年12月。  
 ネルーダ生誕百周年記念講演「『マチュピチュの頂』—自然と歴史のダイナミズム」（於）立教大学 2004年11月。  
 講座「ラテンアメリカの作家とこども時代」ラテンアメリカの子供の世界 第28回ラテンアメリカ事情講座（上智大学イベロアメリカ研究所） 2004年5月。  
 シンポジウム「越境性のアポリア」表象文化とグローバリゼーション（東京外国語大学）2004年1月。  
 講座「ラテンアメリカ文学とパロディ」（於）朝日カルチャーセンター 2004年1月。  
 講座「ハリウッドをぶっ飛ばせ！スペイン&ラテン映画」（於）東西文化センター 2004年1月。  
 シンポジウム「フォークナーと中上健次」熊野大学夏期特別セミナー（和歌山県新宮市） 2003年8月。  
 第21回例会講演「スペイン+イスペインアメリカ文学の最前線から」（於）東京外国語大学本郷サテライト 2003年7月。  
 シンポジウム「《越境》のアポリア—反グローバリズムの可能性—」表象文化とグローバリゼーション

ヨン（東京外国語大学） 2003年1月.  
 公開シンポジウム「マイノリティ&文化創造」（於）立教大学 2002年11月.  
 シンポジウム「翻訳者が見たオクタビオ・パス」メキシコ文化週間 2002年10月.  
 講演「メキシコ文学と映画の饗宴」（中日新聞社）2002年9月.  
 講座「60年代のラ米文学ブームとポピュラーカルチャー」（上智大学）2002年6月.  
 講座「アルゼンチン サッカーとタンゴ」（朝日カルチャーセンター）2002年5月.  
 講演「スペイン文学の可能性—運動するスペイン語」（日本スペイン協会）2002年3月.  
 シンポジウム「戦争と文化のグローバリゼーション」（東京外国語大学）2001年1月.  
 トーク「1990年代のメキシコ映画」（於）アテネ・フランセ文化センター 1999年11月.  
 シンポジウム「迷宮を讀んで ボルヘス生誕百年を祝う」 1999年7月.  
 「幻想と知—アルゼンチン文学の魅力—」日本=アルゼンチン修好百周年記念講演会（於）京都外国語大学 1998年12月.  
 「日本におけるアルゼンチン文学の受容」早稲田大学・アルゼンチン講座 1998年11月.  
 講座「ラテンアメリカ文学が世界に発信したこと—ガルシア・マルケスを中心に」（於）三島市民文化会館 1998年6月.  
 「チリ文学の特質—小説を中心に」日本チリ修好百周年記念セミナー（於）国際交流基金・国際ホール 1998年2月.  
 「中上健次とラテンアメリカ文学」日本近代文学会（於）立教大学 1997年11月.  
 講座「ラテンアメリカ文学とキューバ」（於）中央労政会館 1996年2月.  
 「アナ・リディア・ベガ」立教大学英米文学会（於）立教大学 1993年12月.  
 シンポジウム「Aculturación/transculturación: parodia e ironía en la narrativa de Ana Lydia Vega.」「文学・芸術・トランスカルチャーレーション」（於）ハバナ大学 1992年12月.  
 「La novela y el cine experimentales en México en la década del 60」カナダ・ラテンアメリカ学会（於）オタワ大学 1992年10月.  
 「Momento dinámico de la cultura mexicana」国際イスパニヤ学会 カリフォルニア大学アーバイン校（UCI） 1992年8月.  
 「Vanguardismo Literario en Hispanoamérica」Simposio de la Academia Castilla（於）国際文化会館 1990年4月.  
 シンポジウム「マヌエル・プイグ+村上龍+野谷文昭」海外文学フォーラム（於）九段会館 1990年3月.  
 「神話・物語・小説—ラテンアメリカのドストエフスキー」（於）早稲田大学 1986年6月.  
 「Renga:Nuevas posibilidades de la poesía colectiva」世界詩人会議マドリッド大会 1982年7月.

## 6. 字幕翻訳

「低開発の記憶」トマス・グティエレス=アレア（キューバ）字幕翻訳  
 「永遠のこどもたち」J・A・バヨナ（スペイン=メキシコ）字幕監修.  
 「グラン・カジノ」ルイス・ブニュエル 字幕監修.  
 「忘れられた人々」ルイス・ブニュエル（メキシコ）字幕翻訳.  
 「のんき大将」ルイス・ブニュエル（メキシコ）字幕監修.  
 「幻影は市電に乗って旅をする」ルイス・ブニュエル（メキシコ）字幕監修.  
 「ナサリン」ルイス・ブニュエル（メキシコ）字幕監修.  
 「私の秘密の花」ペドロ・アルモドバル（スペイン）字幕監修.  
 「ハイヒール」ペドロ・アルモドバル（スペイン）字幕監修.  
 「神経衰弱ぎりぎりの女たち」ペドロ・アルモドバル（スペイン）字幕監修.  
 「大きな翼を持った老人」フェルナンド・ビリ（キューバ=イタリア=スペイン）字幕翻訳.  
 「エル」ルイス・ブニュエル（メキシコ）字幕翻訳.  
 「予告された殺人の記録」フランチェスコ・ロージ（仏=伊）字幕翻訳.



「昇天峠」 ルイス・ブニユエル（メキシコ）字幕翻訳。

「タンゴ ガルデルの亡命」 F・E・ソラナス（仏=アルゼンチン）字幕翻訳。

「100人の子供たちが列車を待っている」 イグナシオ・アグエロ（チリ）字幕翻訳。

作成：石井登、仁平ふくみ  
2012年10月